



Title	<紹介>荒木浩著『説話集の構想と意匠 今昔物語集の成立と前後』
Author(s)	中川, 真弓
Citation	語文. 2012, 99, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70896
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

荒木浩著『説話集の構想と意匠—今昔物語集の成立と前後』

中川真弓

本書は、荒木浩氏がこれまでの研究の中から特に説話集に関する論考を厳選し、全面的に増補・補訂した上で、数編の新稿を加えて集成された、七〇〇頁を超える大著である。各章は、以下のように構成されている。

第一章「今は昔」の説話集には、第一節「今は昔」の文学史——起源と再生——、第二節「今は昔」の意味論——宇治大納言物語の周辺——、第三節「源隆国における安養集と宇治大納言物語の位相——南泉房と延久三年をめぐつて——」、第四節「宇治大納言物語享受史上の分岐——顯昭所引の佚文をめぐつて——」を収める。本章では、物語の祖とされる『竹取物語』が生み出した「今は昔」の冒頭語をめぐり、一つの大きな文学史が提示されている。

「今は昔」という起筆は、『源氏物語』の登場とその文学的達成によつて姿を消すことになるが、平安後期以降の「説話集」の時代に、新たな意味をもつて再生する。ここで焦点を当てられるのが、現在は散逸し、各作品に多くの痕跡を残す「宇治大納言物語」である。著者は作品群をひとまとめて論じるのではなく、問題を丹念に区切り、考察を加えていく。本章で論じられる、源隆国が著した二つの書物、『安養集』と『宇治大納言物語』をめぐつては、同時代の勧学会の存在を背景に置いたとき、両書が鏡合わせのよ

うな対照を見せていることが明らかにされている。

第二章「今昔物語集の構想と意匠」には、第一節「阿難結集説と〈如是我聞〉の構造——今昔物語集の形式をめぐつて——（上）」、第二節「説話集と物語と——今昔物語集の形式をめぐつて——（下）」、第三節「廃墟の表徴——今昔物語集の意匠をめぐつて——」、第四節「〈表題〉から見えるもの——鈴鹿本今昔物語集から——」、第五節「三宝感應要略録の出現と震旦仏法史の割期」を収める。『今昔物語集』をはじめとする説話集は、先駆となる作品の記述を前提として支えられている。本章では、書物が、その成立以前から存する文献記事をいかに取り込み、あるいはまた、敢えて採らなかつたかなどを、文学史的な視点で解明していく。特にこの、「今は昔」が自らの構想のために取捨選択をおこなうことに関して、著者が広い視野のもと緻密な考察を重ねていく過程は圧巻である。

第三章「今昔物語集本朝部の構想と世界」には、第一節「三宝絵から今昔物語集へ——三国仏法史観と説話文学史の視界——」、第二節「仏法初伝と太子伝——本朝仏法部の始発をめぐつて——」、第三節「聖德太子伝から国史へ——今昔物語集本朝部という構想——」、第四節「今昔物語集本朝部の構想——卷二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐつて——」を収める。前章に統いて「今は昔」を主な対象とする本章では、本朝部における仏教初伝の記載の欠落と、震旦部における記述との対置関係に、「今は昔」の自覺的な意図を読み取る。「今は昔」が、どのように日本の歴史を位置づけようとして

たのか、また、どのように世界観を描こうとしたのか。著者による周密な読解が施されるなかで、「今昔」には「世界史的視野の文化史の中で、確実に一つの文学史が、自覚されつつあつた」（三三二六頁）ことが導き出されている。

第四章「宇治拾遺物語の意匠と世界」には、第一節「異国へ渡る人びと—宇治拾遺物語論序説」、第二節「宇治拾遺物語の時間」、第三節「ひらかれる〈とき〉の物語—宇治拾遺物語の中へ」、第四節「地蔵から觀音へ—宇治拾遺物語の中世」、第五節「〔次第不同〕の物語—宇治拾遺物語の世界」、付節「〈なるべし〉という表現のこと—〈自記〉と〈他記〉とのあわい」を收める。本章では、「宇治拾遺物語」に焦点が当てられる。冒頭に「抄出之次第不同也」と付記され、一見雑纂されているように見えるこの作品は、連続する各話が「連想」によつて繋がれていることが知られている。しかし、単に連続する要素を見出そうとすることにとどまる研究動向に対し、著者は鋭く警告を与える。本章での考察によつて、「読む」という行為、そして「読者」の存在が意識されて書かれた「宇治拾遺物語」の作品世界へと、われわれ現代の読者もまた導かれる。

終章は、「宇治大納言物語の方法と文学史」と題された新稿である。本書によりその姿が浮き彫りとなつた「宇治大納言物語」が改めて文学史上に位置付けられている。

本書が明らかにするのは、『今昔物語集』をはじめとする、「宇治大納言物語」を享受した各作品の成り立ちであり、編者たちの

文学的営為である。各説話集が、単に説話を集積するのではなく、知的な編集行為によつて提供されていることが示されている。多岐に渡る先行研究に対する深い目配りと、浩瀚な知識、精緻な分析によつて、本書が日本文学研究史上に与えた意義は大きい。

著者は、あとがきで本書について、「このテーマに関する私の、現在でありすべてである」（七一四頁）と述べ、自らの原点でもある研究を画されている。もつとも、本書は著者の研究の一部でしかない。各節の注にも挙げられている著者の論文を拾えば、その世界がこの一冊では收まりきらないものであることは明らかである。今回採られなかつた論考を含め、今後新たな構想のもとに、新たな著作を生み出されることが俟たれる。説話文学研究者だけではなく、他のジャンル・時代を研究対象とする人々にとつても有益な一冊となろう。

（勉誠出版、二〇一二年四月、七六八頁、一二一、六〇〇円）

（なかがわ・まゆみ　日本学術振興会特別研究員）